2014 1/14
No.1962
毎月第2・第4火曜日発行

政経かながわ

一般社団法人
―神奈川政経懇話会―

元日恒例の第93回天皇杯全日本サッカー選手権は１日、改築前最後となる東京・国立競技場での決勝に４万6599人の観衆を集めて行われ、横浜Ｆ・マリノスがサンフレッチェ広島を２－０で下して21大会ぶり７度目の頂点に立った。

神奈川新聞社

政経かながわ

2014 1/14 No.1962

contents

視点・点描 3
農家レストラン「元年」に

国　際 4
東アジア、視界不良
影落とす歴史、領土問題

政治反射鏡 7
国際秩序への無神経さ
安倍首相の靖国参拝

国　際 8
遅すぎる韓国TPP参加方針
背景に手詰まりの経済政策

くらし2014 10
根が深いディオバン問題

広告珍談 12
新聞広告が始まった①
めでたし、めでたし

NNAアジア経済リポート 13

会員のページ 14
事務局からのお知らせ

会員のページ 15
新理事です
会員の動き
事務局からのお知らせ

事務局だより

◇横浜定例講演会

2014年1月29日（水）
14時～15時30分
横浜情報文化センター　6階
「情文ホール」
講師は全日本男子柔道監督、
東海大学講師の井上　康生氏
演題は「夢への挑戦～私の柔道人生」

視点点描

農家レストラン「元年」に

伊勢原市西富岡、畑の真ん中に白壁のレストランがある。採れたての新鮮な野菜が自慢だ。「はなまるキッチン」は、昨年5月オープンした。季節にもよるが、ニンジン、カブ、ナス、大根などコースで十数種類が楽しめる。農家が経営する「農家レストラン」がいま注目されている。

自ら生産した農産物や地域の食材を提供する飲食店を、広い意味で農家レストランと呼ぶ。食材が新鮮なだけでなく、食事をしながら野菜づくりの苦労を聞けるのも特徴だ。生産者とじかにふれあえば料理もぐっとおいしくなる。

農業や漁業の盛んな地域を観光で訪れるグリーンツーリズムなどとともに十数年前から少しずつ浸透してきた。昨年10月に発表された国家戦略特区の規制緩和策に、農家レストラン普及のための施策が盛り込まれ、一気に脚光を浴びた。少し大げさに言えば、日本の成長戦略の一つに組み込まれたということである。これまで農作物を生産するために利用が規制されていた農用地区域でもレストラン経営が可能になる。

「はなまるキッチン」代表の石井久喜さんは41歳。もともとフランス料理のシェフを目指していた。34歳で野菜生産を始め、農家レストランを開くのが夢だった。いまでは伊勢原市や小田原市などの約6ヘクタールの農園で150種類以上の露地野菜を有機肥料で生産している。

ただ普及には課題が多い。飲食店ゆえ食品衛生責任者が必要な上に農家こそのメニューで消費者にアピールしなければならない。ハードルは高く、「はなまる」は少ない成功例の一つだ。

国が農家レストラン普及を目指すのは、高齢化や担い手不足、耕作放棄地の増加で厳しい状況にある国内農業の再生のためだ。農業経営の幅を広げることで所得を上げるのが狙いである。

農家レストランは農業再生の象徴の一つなのだろう。意欲的に経営に取り組む若手の登場があってこそ普及は可能になる。さて、今年は「農家レストラン元年」にふさわしい年となるのだろうか。

（神奈川新聞社編集局次長　小野　明男）

めでたし、めでたし

新年おめでとうございます。ことしもこの連載、お読みいただけますように。

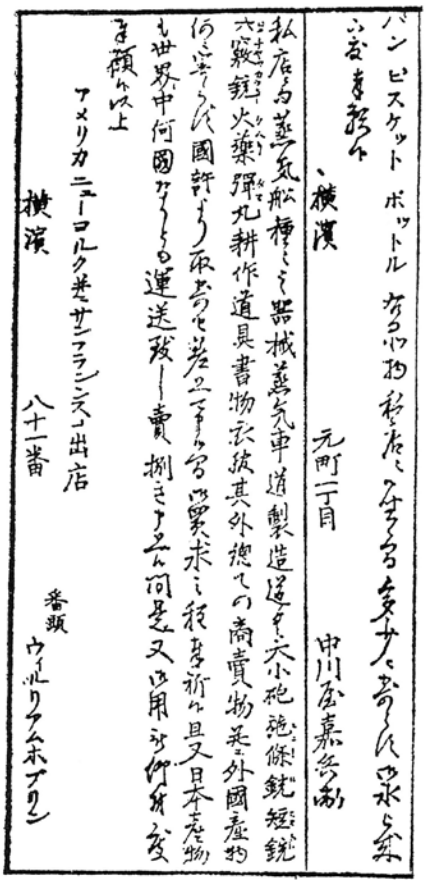
まずはこの広告、おめでたいのです。

といっても読みにくい文字だらけで、素っ気ない。だけど、日本人が、日本語で、日本語の新聞に初めて載せた広告だから、めでたいのです。まぁ、しばらくお付き合いください。

横浜は、日本語の新聞の発祥地である。

1865（慶応元）年5月、《海外新聞》が発刊された。民間人が発行した最初の日本語の新聞。中身はヨーロッパの新聞の翻訳。出したのはジョセフ・ヒコこと浜田彦蔵と、岸田吟香。有名な油絵「麗子像」の作者・岸田劉生の父。つまり麗子のおじいさん。

ついで67（慶応3）年1月、イギリス人宣教師マーシャル・ベイリーが《万国新聞紙》を発刊した。「此新聞は、我国新聞広告史の上において最も尊敬すべき新聞である。何となれば官板時代より民間の新聞発行に移り、広告を思ふ儘に載せたのは此新聞であり、我国民間における新聞の鼻祖（びそ）であると共に、又実に新聞広告の鼻祖であった」と、日本電報通信社（電通の前身）が『日本新聞広告史』（1940（昭和15）年刊）に賛美した新聞である。


パン　ビスケット　ボットル
右品物私店ニ御座候間、多少
に寄らず御求被成下度奉願候
横濱　元町一丁目　中川屋嘉兵衛
アメリカ　ニューヨルク　サンフランシスコ出店
横濱　八十一番　番頭　ウィルリアムホプリン

官板時代とは幕府が62（文久2）年1月、発刊した《官板バタビア新聞》のこと。オランダ総督府の機関紙を訳した内容。政府の出版物だから広告は載せない。商売とはいえ電通（もっとも電通の創業は1901年だけど）が褒めたたえるほど、《万国新聞紙》は、日本語の広告がふんだんに掲載された。その最初の広告がこれ、おめでたい理由である。

「パン　ビスケット　ボットル
右品物私店ニ御座候間、多少
に寄らず御求被成下度奉願候
横浜　元町一丁目　中川屋嘉
兵衛」

中川屋嘉兵衛、ほこらしい日本人初の広告主。店の隣に、パン焼き窯を備えたイギリス軍関連の売店があり、そこからパンやビスケットを仕入れたという。じつは中川屋は牛肉のイラスト入り広告（本誌1933号をどうぞ）を掲出した先進的な人であった。

左の大枠は、81番にあるアメリカ商社の広告。広告主が「番頭ウィリアムホプリン」とおもしろい。

（美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住）

（図） 日本人最初の日本語の広告（右の細い枠）・1867（慶応3）年3月、万国新聞紙掲載